

第2章 帯広の歴史

早川 織恵

2.1 明治時代

明治2年蝦夷地を北海道と改め、開拓史を設け、国・郡に分けた。十勝場所は十勝国となり、広尾・当縁・十勝・中川・河東・河西・上川の7郡に分けられた。帯広地方は河西郡に属した。十勝・中川・河東・上川は静岡藩、広尾・当縁・河西は鹿児島藩の支配下に入り、間もなく鹿児島藩の領地は徳川家直系の一橋家と田安家にゆだねられる。その後十勝国はすべて徳川家一族の領地となり、帯広は一橋家の支配下に置かれる。

明治8年、和人とアイヌによる十勝組合（十勝漁協組合）が組織されるが、独占的な経営であり、和人の内陸地への入地を拒むなどより13年に解散。十勝は自由の地となり世に注目される。この時十勝沿岸部を視察に訪れていた依田勉三は、静岡県に帰り、15年には開拓団晩成社（社長・依田園）を組織した。同年、勉三と同志鈴木銃太郎は十勝を視察、銃太郎はオベリベリに残り、勉三は一時帰郷し渡邊勝とともに入植準備に奔走した。



入植当時の晩成社の人々

明治16年、依田勉三ら13戸27人の晩成社の人々がオベリベリ（現在の水光園周辺）に入植する。

明治21年に十勝国は殖民地に選定される。25年には殖民地地区画をはじめた。殖民地地区画はアメリカ合衆国から学んだものであり、米国農村の集落方式疎居制を採用した。26年から帯広市街予定地区画が始まり、1900戸分が測定された。当初の帯広市街予定地は殖民地地区画を基盤にしており、これはワシントン型の殖民都市の設計手法である格子パターンと斜交画色パターンを導入したと考えられる。



帯広市街地区画図

明治30年、下帯広村外8村（^{ほらとう}荊苞・^{とつた}上帯広・^{せまりべつ}伏古・^{ぬえぬつき}幸震・^{とつた}売買・^{せまりべつ}戸蔦・^{ぬえぬつき}迫別・^{ぬえぬつき}鶴抜）を廃合し、帯広町・伏古村・幸震村・売買村・上帯広村の1町4村に整理され、これを組合として北海道二級町村制が施行され、帯広町外四村組合役場が帯広町におかれた。その際、下帯広・荊苞は廃止され帯広町に、迫別は上帯広村に、戸蔦は売買村に、鶴抜は幸震村に廃合された。

明治31年には帯広一茂寄間の広尾街道が開削され、32年には石狩・十勝両国をつなぐ道路ができた。

明治38年釧路―帯広間の鉄道が開通、帯広駅が開業する。40年には旭川―帯広間が開通した。このため輸送費が安価になり、大豆などの販売が有利になった。

2.2 大正時代

大正4年、帯広町は一級町村として出発した。このときの人口は約8457人、戸口1950世帯であった。これまで組合役場をつくっていたうちの幸震村・売買村・上帯広村が廃止

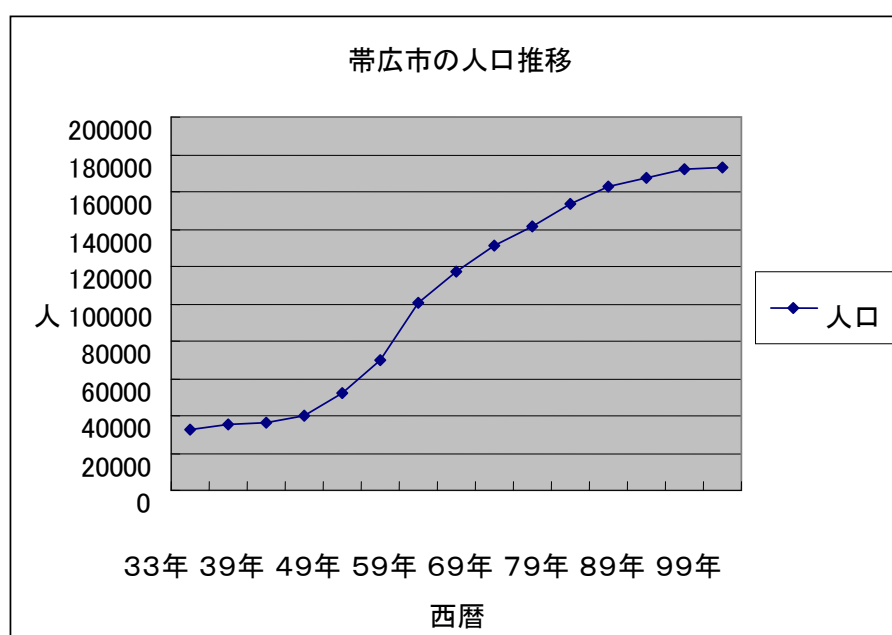
され、新たに大正村として二級町村制が敷かれた。また、伏古村はその北端を帯広町に、その他は芽室町に編入された。

大正 14 年に上士幌線帯広―士幌間が開通し、翌年には全通した。

2.3 昭和時代

昭和 7 年、河西支庁は十勝支庁に改称される。また、同年 12 月、帯広開拓の草分けとなった晩成社は、入植から約 50 年にして解散した。

昭和 8 年、帯広は、札幌・函館・旭川・室蘭・小樽・釧路に次ぎ、北海道で 7 番目の市として誕生した。このときの人口は 32506 人、戸口 6324 世帯であった。



2.4 晩成社と依田勉三

依田勉三は明治 7 年に慶應義塾本科に入塾している。当時の塾長・福沢諭吉は当時来日していた米国農務長官ケプロンとの交流を通して、北海道開拓の重要性を説くに至り、また、ケプロンの書いた報告書「ケプロン報文」は北海道開拓構想をまとめたもので、これらのことが勉三の心を大きく動かした。

北海道開拓を目的とした農事会社「晩成社」は、明治 15 年 2 月 19、20 日の両日、静岡県伊豆国那賀郡松崎村の依田園宅に依田一族と同志渡邊勝等が相会して晩成社規則を協議し、調印を終えたのは同年 4 月 3 日のことである。ここに明治 15 年 1 月 1 日を創立日とする晩成社の誕生となった。

晩成社規則は、原野を速やかに開墾するには牧畜が最上で、その後人口増によって熟田

とし国富を盛んにしたいというものであった。具体的な目標としては、営業は50年間とし、政府から未開地1万町歩の無償払い下げを受け、これを15年間で開墾しようというものであった。

明治14年、勉三は単身で北海道を探索している。2ヶ月の探索の後、郷里に戻り十勝内陸、石狩、日高を入植地候補としてあげた。

明治15年、鈴木銃太郎と開墾地を決定するために北海道へ向かう。十勝地方を開墾地に決定し、単身で帰郷する。帰郷後移住に必要な準備をし、翌年晩成社の人たちとともに北海道へ移住した。同年5月9日勉三は静岡県庁に「北海道開墾之儀ニ付御添翰願」を提出、その中には北海道石狩・十勝・日高等の内において開墾の事業を起こし志を果たしたいとある。十勝国河西郡下帯広村へ移住を決定したのは同年7月16日のことである。

明治16年5月20日下帯広村へ入植。

昭和7年12月31日、晩成社は解散した。

2.5 帯広とアイヌ

帯広の名前の由来はアイヌ語の「オペレペレケプ」（川尻がいくつも分かれる川）がなまり、「オベリベリ」、そして帯広になったと考えられている。また、この地方に本別・陸別・幕別・然別湖などのように、～ベツという地名が多いのは、アイヌ語でベツ（ペツ・pet）＝川という意味であり、十勝地方に大きな川が多いことに由来している。

帯広周辺に住んでいたアイヌは、明治16年の晩成社の団体入植に不安を感じ次々と去っていった。当時十数戸約50人住んでいたアイヌの人たちは、明治17年には村長モチャロクを最後に全員が晩成社周辺を去った。しかしその後、アイヌと晩成社の関係は疎遠になったわけではなく、晩成社を訪れ開拓の仕事に従事協力した。この前年大雪によってサケ漁が禁止、鹿の大量死が原因でアイヌは飢饉に見舞われるが、これを機に18年に「アイヌ開墾事務所」が設立され、入植者に農業を教わる。狩猟・漁業の民であったアイヌにとって大転換期であった。